

# 博物館資料の活用に基づく学校連携プログラム

小林 弘一・篠崎 彩乃

## 1 はじめに

社会の変化が著しく、大量の情報が溢れる中、取捨選択を通して、適切に判断する力が必要とされている。事を自分事として捉え、興味・関心を持って社会参画の基礎を育むことが今の教育に求められている。

教育基本法第12条の2において「国及び地方公共団体は、図書館、博物館、公民館その他の社会教育施設の設置、学校の施設の利用、学習の機会及び情報の提供その他の適当な方法によって社会教育の振興に努めなければならない」とあるように博物館は社会教育の振興の場でもある。このことは博物館法の第2条「この法律において「博物館」とは歴史、芸術、民俗、産業、自然科学等に関する資料を収集し、保管（育成を含む）し、展示して教育的配慮の下に一般公衆の利用に供し、その教養、調査研究、レクリエーション等に資するために必要な事業を行い、あわせてこれらの資料に関する調査研究をすることを目的とする機関」とあり、第3条の9には「社会教育における学習の機会を利用して行った学習の成果を活用して行う教育活動その他の活動の機会を提供し、及びその提供を奨励すること」とある。

学習において具体的な資料や体験的な学習は、児童生徒の興味関心を喚起し、思考を深め、知識の定着に影響がある。そうした多様な学習形態を生かして授業を改善していくことは平成29年に告示された新学習指導要領の総則の中にも取り上げられている。教育課程の実施と学習評価1の主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善の(7)「学校図書館を計画的に利用しその機能の活用を図り、児童の主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善に生かすとともに、児童の自主的、自発的な学習活動や読書活動を充実すること。また、地域の図書館や博物館、美術館、劇場、音楽堂等の施設の活用を積極的に図り、資料を活用した情報の収集や鑑賞等の学習活動を充実すること」とあり、博物館や美術館等の地域施設を活用することで児童生徒の主体的で対話的な深い学びを實踐できる授業づくりに生かすことが学校としても重要になってきている。

だが、一方で実際の資料を授業の中で生かすということは保存の観点からすると難しい部分も多い。保存環境の整った博物館、美術館に直接来てもらい指導をしてもらうという方法がよいのだが、場所や時間によって学校も必ず訪問できるというわけではない。そうなると博物館から学校へ訪問をして授業を行うという方法が考えられる。しかし、実際の資料を活用すると素材にもよるが日光、特に紫外線によるもの、外気や湿気による影響、虫やカビ等の心配が考えられる。また、運搬による破損や手で持つことによる危険性（落下による破損、手の油による劣化）もあるだろう。こうしたことを踏まえながら授業を行っていかなければならない。また、こうしたことをきちんと指導することも資料を活用する上で必要となってくるだろう。

## 2 館と学校の連携について

さきたま史跡の博物館は学校に対して「学校団体予約」、「出張授業」、「教職員への研修」の取組をしている。今回は特に出張授業における学校との連携について報告をしていく。

さきたま史跡の博物館及び埼玉古墳群は小学校においては社会科の内容と関連が深い。特にさきたま史跡の博物館に展示されている国宝の「金錯銘鉄剣」は小学校の6年生社会科では教科書に掲載さ

れており、「(前略)大和朝廷(大和政権)による統一の様子を手掛かりに、むらからくにへと変化したことを理解すること。」(小学校学習指導要領第6学年の目標及び内容ア(ア))と学習内容に関わりがある。また、「遺跡や文化財、地図や年表などの資料で調べ、まとめること」(小学校学習指導要領第6学年の目標及び内容のア(シ))の具体的な方法として「(前略)、土器などの遺物について、地域にある博物館や資料館などを利用して調べたり、身近な地域に残されている古墳を観察・見学したり」、「博物館や資料館などを見学して適切に情報を集める」ということが挙げられている。

中学校の学習指導要領でも同様に「(前略)大和朝廷(大和政権)による統一の様子と東アジアとの関わりなどを基に、東アジアの文明の影響を受けながら我が国で国家が形成されていったことを理解すること」(中学校学習指導要領歴史分野の目標及び内容ア(イ))と取り上げられており、その資料として国宝の「金錯銘鉄剣」が教科書に掲載されている。また、内容の取扱いの中に「(前略)、また、考古学などの成果を活用するとともに、古事記、日本書紀、風土記などにまとめられた神話・伝承などの学習を通して、当時の人々の信仰やものの見方などに気付かせるよう留意すること」とあり、「考古学などの成果」を「新聞記事や地域の遺跡、博物館の活用を図るような学習も考えられる」としている。

こうしたことを基にして、さきたま史跡の博物館では令和3年度に2つの出張授業プログラムと1つの体験学習プログラムを作成、実施した。

一つ目は「なるほど!古墳時代 埴輪 Ver」である。この授業は鴻巣市の新屋敷遺跡で出土した円筒埴輪片を口縁部、中部、下部の3種類をグループごとに用意をして、その破片を観察しながら何の破片かを探っていく授業である。具体的な遺物を観察・調査し、そこから情報を読み取り対話しながら正解を探る。その後埴輪の種類についての学習とその役割について児童に考えさせ、古墳時代の人々のくらしや埴輪に込められた思いなどを感じさせることが目的となる。また、具体的な資料を調査するため学芸員が資料の扱い方を指導し、児童にその資料の大切さを感じさせることも目的としている。

二つ目は「なるほど!古墳時代 鉄剣 Ver」である。この授業は教科書に掲載されている稲荷山古墳から出土した「金錯銘鉄剣」と江田船山古墳(熊本県)から出土した「銀象嵌鉄刀」の内容を読み比べて、その共通点と相違点を探り、その資料2つの資料が何を表しているのかを読み取る授業である。2つの遺物から大和朝廷(大和政権)の国土の広がりや理解させるとともに国土が統一されていった様子を学ぶことにな

さきたま史跡の博物館出張授業「なるほど!古墳時代」授業比較表																					
1 目標																					
○古墳や遺物などについて話を聞いたり、実際に触ったりすることを通して、古墳時代について関心を高めるとともに、古墳や遺物から古墳時代の様子について理解を深める。																					
○学芸員の仕事に関心をもち、夢や希望に向かって努力する態度の形成を図る。【キャリア教育の視点】																					
2 展開																					
	<table border="1"> <thead> <tr> <th>A 埴輪 ver</th> <th>B 鉄剣 ver</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>1 既習事項の確認 ○「仁徳天皇陵古墳(大仙古墳)」 ○「古墳クイズ」 ○埴玉古墳群について</td> <td></td> </tr> <tr> <td>2 博物館、学芸員の役割の説明</td> <td></td> </tr> <tr> <td>3 学習問題 「資料を調べて何の破片か考えよう」</td> <td>3 学習問題 「2つの遺物から、古墳時代の様子を知らよう」</td> </tr> <tr> <td>4 資料の扱い方を学び、遺物を調べる ○机上の破片が何の破片なのか、理由とともに意見を交流する。(個人グループ全体) ○見つかった遺物がどのように復元されているのか作業の様子を見る。</td> <td>4 2つの遺物の紹介 (A) 金錯銘鉄剣【埼玉県：稲荷山古墳】 (B) 銀象嵌鉄刀【熊本県：江田船山古墳】</td> </tr> <tr> <td>5 埴輪の種類を知り、役割について考える。 ○埴輪の種類やその違いについて知る。 ○埴輪の役割について考えを持ち、全体で意見を交流する。 「円筒埴輪」「人物埴輪」「動物埴輪」</td> <td>5 出土した遺物を比較する (1) 個人の学習(観察・質問) 2つの遺物について調べる。 (2) ペアの学習(対話・協働) 共通点を見つかる。 共通点からわかったことを考える。 (3) 全体の学習 学級全体でまとめる。 ★ジグソー活動でも実施可★</td> </tr> <tr> <td>6 まとめ 「色や厚さ、表面の様子から埴輪の破片である。埴輪には、古墳の場所や大きさを知らせたり、埋葬者のためのお祭りに使ったりする役割がある。」</td> <td>6 まとめ 「大和朝廷(大和政権)の力が関東や九州まで広がっていた。」</td> </tr> <tr> <td>7 (1) 学芸員の話や写真から発掘や調査、資料の活用の仕方などを学ぶ。 ○古墳を発掘する意味や発掘するときの様子、資料等の画像を見ながら知る。</td> <td></td> </tr> <tr> <td>(2) 古墳群から出土した他の遺物について「金錯銘鉄剣」</td> <td>(2) 古墳群から出土した他の遺物について「古墳群出土の埴輪」 ①埴輪片の観察(実物資料) ②埴輪の説明(レプリカ資料) ・円筒埴輪 ・形象埴輪(人物埴輪・動物埴輪等)</td> </tr> <tr> <td>★実物資料を用いて学芸員から資料の扱い方や見方を学ぶ ★古墳の発掘や埴輪の復元の様子など学芸員の経験を基に授業を行う。</td> <td>★基礎基本の定着(大和政権の広がり) ★国宝「金錯銘鉄剣」の詳細を知れる。 ★「主体的・対話的で深い学び」の実現</td> </tr> </tbody> </table>	A 埴輪 ver	B 鉄剣 ver	1 既習事項の確認 ○「仁徳天皇陵古墳(大仙古墳)」 ○「古墳クイズ」 ○埴玉古墳群について		2 博物館、学芸員の役割の説明		3 学習問題 「資料を調べて何の破片か考えよう」	3 学習問題 「2つの遺物から、古墳時代の様子を知らよう」	4 資料の扱い方を学び、遺物を調べる ○机上の破片が何の破片なのか、理由とともに意見を交流する。(個人グループ全体) ○見つかった遺物がどのように復元されているのか作業の様子を見る。	4 2つの遺物の紹介 (A) 金錯銘鉄剣【埼玉県：稲荷山古墳】 (B) 銀象嵌鉄刀【熊本県：江田船山古墳】	5 埴輪の種類を知り、役割について考える。 ○埴輪の種類やその違いについて知る。 ○埴輪の役割について考えを持ち、全体で意見を交流する。 「円筒埴輪」「人物埴輪」「動物埴輪」	5 出土した遺物を比較する (1) 個人の学習(観察・質問) 2つの遺物について調べる。 (2) ペアの学習(対話・協働) 共通点を見つかる。 共通点からわかったことを考える。 (3) 全体の学習 学級全体でまとめる。 ★ジグソー活動でも実施可★	6 まとめ 「色や厚さ、表面の様子から埴輪の破片である。埴輪には、古墳の場所や大きさを知らせたり、埋葬者のためのお祭りに使ったりする役割がある。」	6 まとめ 「大和朝廷(大和政権)の力が関東や九州まで広がっていた。」	7 (1) 学芸員の話や写真から発掘や調査、資料の活用の仕方などを学ぶ。 ○古墳を発掘する意味や発掘するときの様子、資料等の画像を見ながら知る。		(2) 古墳群から出土した他の遺物について「金錯銘鉄剣」	(2) 古墳群から出土した他の遺物について「古墳群出土の埴輪」 ①埴輪片の観察(実物資料) ②埴輪の説明(レプリカ資料) ・円筒埴輪 ・形象埴輪(人物埴輪・動物埴輪等)	★実物資料を用いて学芸員から資料の扱い方や見方を学ぶ ★古墳の発掘や埴輪の復元の様子など学芸員の経験を基に授業を行う。	★基礎基本の定着(大和政権の広がり) ★国宝「金錯銘鉄剣」の詳細を知れる。 ★「主体的・対話的で深い学び」の実現
A 埴輪 ver	B 鉄剣 ver																				
1 既習事項の確認 ○「仁徳天皇陵古墳(大仙古墳)」 ○「古墳クイズ」 ○埴玉古墳群について																					
2 博物館、学芸員の役割の説明																					
3 学習問題 「資料を調べて何の破片か考えよう」	3 学習問題 「2つの遺物から、古墳時代の様子を知らよう」																				
4 資料の扱い方を学び、遺物を調べる ○机上の破片が何の破片なのか、理由とともに意見を交流する。(個人グループ全体) ○見つかった遺物がどのように復元されているのか作業の様子を見る。	4 2つの遺物の紹介 (A) 金錯銘鉄剣【埼玉県：稲荷山古墳】 (B) 銀象嵌鉄刀【熊本県：江田船山古墳】																				
5 埴輪の種類を知り、役割について考える。 ○埴輪の種類やその違いについて知る。 ○埴輪の役割について考えを持ち、全体で意見を交流する。 「円筒埴輪」「人物埴輪」「動物埴輪」	5 出土した遺物を比較する (1) 個人の学習(観察・質問) 2つの遺物について調べる。 (2) ペアの学習(対話・協働) 共通点を見つかる。 共通点からわかったことを考える。 (3) 全体の学習 学級全体でまとめる。 ★ジグソー活動でも実施可★																				
6 まとめ 「色や厚さ、表面の様子から埴輪の破片である。埴輪には、古墳の場所や大きさを知らせたり、埋葬者のためのお祭りに使ったりする役割がある。」	6 まとめ 「大和朝廷(大和政権)の力が関東や九州まで広がっていた。」																				
7 (1) 学芸員の話や写真から発掘や調査、資料の活用の仕方などを学ぶ。 ○古墳を発掘する意味や発掘するときの様子、資料等の画像を見ながら知る。																					
(2) 古墳群から出土した他の遺物について「金錯銘鉄剣」	(2) 古墳群から出土した他の遺物について「古墳群出土の埴輪」 ①埴輪片の観察(実物資料) ②埴輪の説明(レプリカ資料) ・円筒埴輪 ・形象埴輪(人物埴輪・動物埴輪等)																				
★実物資料を用いて学芸員から資料の扱い方や見方を学ぶ ★古墳の発掘や埴輪の復元の様子など学芸員の経験を基に授業を行う。	★基礎基本の定着(大和政権の広がり) ★国宝「金錯銘鉄剣」の詳細を知れる。 ★「主体的・対話的で深い学び」の実現																				
導入																					
展開																					
終末																					
特徴																					

## 2つのプログラムの対応表。

### 学校や児童の実態に応じて選択してもらう

2つの遺物から大和朝廷(大和政権)の国土の広がりや理解させるとともに国土が統一されていった様子を学ぶことにな

る。鉄剣と鉄刀それぞれの資料をペアで調べ合い、お互いに伝え合いながら情報を埋め合わせていくというジグソー学習での実施も可能となる。

この2つの授業は、小学校6年生がちょうど学習する時期である6月の中旬から7月上旬まで近隣の4市（行田市、鴻巣市、羽生市、加須市）を対象に、学校や児童の実態に応じてどちらか1つを選んでもらい実施をした。19校から申込があり、埴輪 Ver を8校、鉄剣 Ver を11校実施した。

体験学習は「作ってみよう！わたしだけのオリジナルまが玉」と題し、館内でも実施している勾玉づくり体験を学校に出張して作成するプログラムである。ただ、作成するのではなく前段で勾玉の歴史や勾玉に関する知識を得てもらい、その後に滑石を使った勾玉づくり体験を行う。勾玉は埼玉県の県章にもなっているため、小学校4年生で学習する「都道府県の様子」でも活用することができる。また、紙やすりで作成するのだが、昔は石の道具を使い、形を整えていったことを教えることで、今と昔との比較にもつながり、体験に基づいて古墳時代の人々の思いにふれることができる。

### 3 実践の様子

実際に授業を行ってみて、児童たちの様子について報告を行う。

#### (1) 「なるほど！古墳時代 埴輪 Ver」

「なるほど！古墳時代 埴輪 Ver」では、実際に出土した埴輪片を使用するため普段学校ではできない体験を行うことができ、教員、児童たちにも好評であった。ただ学ぶというだけでなく、資料の扱い方や資料から考察し対話で考えを深め合うなど児童主体の活動を多くすることで興味関心を育て、資料を根拠にして情報を言語化し伝えることができるようにする下地づくりにもなった。

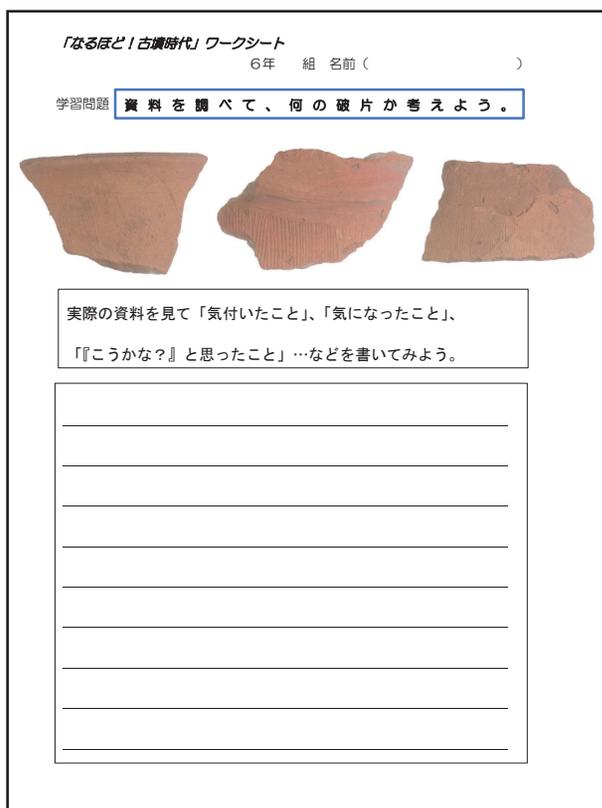
出土資料を使用するため、初めに学芸員から資料の扱い方について説明をしてもらった。これは資料



学芸員が資料を見る視点を与える

の活用と保存という観点からも重要だと位置付けている。実際に資料にふれるということは破損の可能性があったり、状況が変化をしいてしまったりすることは避けられない。しかし、それを最小限に抑え、かつ学習上有効な効果をもたらすために、専門である学芸員にその資料の価値の重要性や失われると二度と同じものがないという貴重性を説明してもらった。その成果もあり、児童は資料を観察する際は、トレイ内の低い位置で観察をしていた。また、学芸員からは資料を観察する際のポイントも指導をもらった。児童生徒は資料が提供されてもそれを漫然と見してしまうことが多い。その“もの”のどこを視るのか、視たものをどう生かすのか。社会科の目標としても高いものとなるが学校の日常的な授業ではなかなか踏み込むことが

できない視点で専門家の学芸員から指導をもらった。埴輪片の場合、「色」や「断面」、「表面の模様」の観察に加え、専門的な言葉である「刷毛目」や「突帯」なども観察ポイントとして紹介をもらった。



対話の前にまずは自分の意見を持たせるためのワークシート

約1500年前の資料を手にした児童たちはとても丁寧に扱い、重みを感じたり、表面の凸凹具合を確認したり、匂いを確認したりと様々な方法で資料にふれることができた。そしてすでに学習をしている縄文土器や弥生土器の特色を見出してみたり、日常生活で自分たちが使っている壺や瓶に近いと考察したり、正解を出すということよりも根拠を持ち対話を重ねながら遺物について考えることができた。終了後のアンケートを見ても「本物を触れてよかった」「貴重な経験だった」という意見が多く、児童の満足度は高いものであった。

また、出張授業後に実際にさきたま史跡の博物館に来館をして、一緒に来ていた家族に円筒埴輪について説明をしている児童もいた。インプットした学習内容を咀嚼して、改めて身近な人にアウトプットすることでその学びは確かなものになる。博物館への関心を高めるとともに資料を“見る”から“視る”へと気付かせる機会にもなった。



ICT や具体的な資料を用いて視覚的に情報を与え、興味関心を高める

## (2) 「なるほど！古墳時代 鉄剣 Ver」

「なるほど！古墳時代 鉄剣 Ver」は、教科書にも掲載されている稲荷山古墳出土の「金錯銘鉄剣」を扱った授業である。学校の授業においては「ワカタケル大王」と書かれた剣と刀が埼玉と熊本から出土したがこれはどういうことを表しているのか？」と発問をし、「当時の大和朝廷(大和政権)が関東から九州まで勢力を広げていた」という学習内容を理解するものになる。鉄剣について学校でふれるのは「埼玉県の行田市にある鉄剣」と「ワカタケル大王」という事実のみになる。学校の教員も「金錯銘鉄剣はワカタケル大王のもの」若しくは「ワカタケル大王が作って配ったもの」という認識でいることもある。そのため児童も漠然と「鉄剣＝ワカタケル大王のもの」という理解になってしまっていることがある。

この授業プログラムでは、そうした金錯銘鉄剣の文字を実際に読んでみてどのようなことが書かれているかを知ると共に熊本県江田船山古墳から出土した「銀象嵌鉄刀」と比較をし、より深い視点で大和朝廷（大和政権）の広がりを学ぶことを目的としている。

多資料を比較するときの学校の指導法の一つに「ジグソー学習」という方法がある。ペア若しくはグループ内でそれぞれの資料を調べるスペシャリストを決め、各自で自分の決められた資料について調べて情報を収集する。その後、自分のグループに戻って自分の収集した情報をお互いに伝え合うことで補完をし合い、考察を深めていくという方法である。今回は「金錯銘鉄剣」と「銀象嵌鉄刀」に共通点と相違点を探すことで、共通のワードである「ワカタケル大王」を発見し、そこから当時の大和朝廷（大和政権）の広がりについて気付くという流れになっている。

「金錯銘鉄剣」は実際の物を学校に持っていくことは不可能であるため、「触れるレプリカ」で代用をした。

節くれだった形状や色は本物とそっくりなため児童も鉄剣に興味を持ちやすかった。加えて金で書かれた文字を見て何が書かれているのか関心を高めていた。全ての文字が漢字しか使われていないというところから「外国から来た剣なの？」という児童もいたため、中国や朝鮮半島とのつながりや文字の伝来にも考えをつなげていくことができる。

また、レプリカで鉄剣の大きさを見た際に「大きい」と言う児童と「思ったより小さい」と思う児童がいた。なかなか剣を見る機会がないのでゲームなどで剣を見たことのある児童は小さく感じ、写真で見たことがあるくらいの児童は大きく感じていたように思われる。レプリカとはいえ、視覚的な効果は強く、児童に大きなインパクトを与えた。また、レプリカではあるが、資料であることは変わりがないためその扱いについては学芸員から



実際のサイズと同じ「銀象嵌太刀」

もふれてもらい、精巧に移したものであるためその扱いについては十分に注意をするように指導をしてもらった。「銀象嵌太刀」はレプリカの用意も難しかったため、同じ長さの発泡スチロールに写真を貼り用意をした。こちらはレプリカほど反応があったわけではないが、文字が書かれたところが太刀の背の部分に当たるため、見せると「こんな細いところに字を書くなんで」と児童は驚きの様子であった。教科書ではどこに字が書いてあるかは示されていないため、その技術力の高さを実際に感じることもできていた。

「金錯銘鉄剣」の実物は博物館にあることを伝えると「見に行きたい」と言ってくれる児童も多く、実際に家族で見に来てくれた児童もいた。学校だけでなく、事後学習も促すことができた。

「なるほど！古墳時代」ワークシート（鉄剣 ver）  
6年 組 名前（ ）

学習課題 **2つの遺物から、古墳時代の様子を知らよう**

1 エキスパート活動 「自分が担当した遺物について調べよう」

熊本県（江田船山古墳）	出土場所	埼玉県（桶狭山古墳）
銀象嵌鉄刀	名称	金錯銘鉄剣
鉄刀	種類	鉄剣
cm	長さ	cm
文字	文字数	文字（表 裏）
	文字の色	
	書かれていた文字など	

2 ジグソー活動 ①互いに調べたことを伝え合おう（上の表を完成させよう）。  
②互いの情報の共通点を考え、そこからわかったことを書いてみよう。

共通点	わかったこと

まとめ

それぞれの資料を対比し、視覚的にとらえやすくしたワークシート



鉄剣のレプリカと 115 文字を拡大したプリント

「金錯銘鉄剣」は特殊なケースで展示をされている。そのケースについても説明をしたが、もう少し詳しくふれることができれば、その資料の価値の高さを児童に伝えることもできたと思う。窒素ガスでケース内を満たし、酸化を防いでいることを考えさせることで資料保存の大切さを児童に考えさせることができる。今を生きる人たちがいるのは昔の人々が積み上げてきた歴史があるからで、文化財はその歴史を教えてくれる大切な証人だということを感じさせる。そうした指導を通して文化財を受け継いでいこうとする児童生徒の態度を育てていくことにもなる。

### (3) 「作ってみよう！ わたしだけのオリジナルまが玉」

「作ってみよう！ わたしだけのオリジナルまが玉」は体験を通して学習を深めるプログラムになっている。このプログラムも学校や児童の実態に応じて時間を変えて行った。基本は60分コースだが、小学校の授業時間に合わせた45分コース。勾玉だけではなく埼玉古墳群や金錯銘鉄剣まで含めた90分コースを用意して学校へ選んでもらった。勾玉や古墳、鉄剣についての基本的な知識を学んでもらうことで、ただの製作体験としてだけでなく、学習と体験を一体としてとらえられるようにしている。

勾玉の形については児童たちもゲームなどを通して知っていることが多く、授業を行う前から楽しみにしている様子が見られた。現在の勾玉づくり体験は紙やすりを使って削っていくが、古墳時代の勾玉は石で道具を作り、石を削り出し、形を整え、磨きをかけて

いる。そうした今と昔の作り方の違いを知ることによって当時の技術力の高さを感じさせるとともに「どうしてきれいな勾玉を作りたいかったのか」という古墳時代の人々の思いにまでつなげていく。

体験としては単調な作業になりやすく飽きてしまう児童も考えられたが、どの子も一生懸命で時間が足りなくなるほど熱中して取り組むことが多い。削っている最中も児童同士でどうすればもっと上手に削れるのかを意見しあったり、お互いに勾玉を見せ合い褒めあったりしていた。自然と主体的に

令和3年度 埼玉県立さきたま史跡の博物館 出張授業

未来を創る。こどもたち。  
未来を育てる。わたしたち。

## 学習指導案(タイムスケジュール) 60分 ver

時間	内容	学校で準備していただくもの
5分	1 まが玉クイズ ・まが玉の説明	ロ大型テレビ・HDMI ケーブル (スクリーン・プロジェクター)
50分	2 まが玉づくり体験 《滑石を紙やすりでけする》  まが玉づくりでは、滑石と呼ばれるやわらかい石を使用します。 セットのまが玉原石(滑石)には稲荷山古墳出土のまが玉とほぼ同形の鏝がかいてあります。 2種類の紙やすりを用いながらこの鏝に沿って削っていくことで、稲荷山古墳出土のまが玉と同じ形のまが玉を作ることができます。	ロ机・イス
(25分)	(1) まわりを削る。 (線の輪郭まで垂直に削る)	
(20分)	(2) 輪郭の角を削り丸みをつける。 管玉を削る。	
(5分)	(3) 細かい傷をとっていく。 管玉を磨いていく。	
5分	4 ひもを通す。 ・管玉 ・まが玉	ロセロテープ(数個) ロパケツ(数個) 

★45分コースの場合

- ・「まが玉クイズ」「まが玉の説明」「管玉けすり」「ひも通し」は行いません。(ひも通しは、各学級・ご家庭での対応)
- ・時間は最低限ですので、児童によっては完成しない可能性もあります。

★90分コースの場合

- ・「まが玉体験」に余裕をもって取り組むことができます。(＋20～30分)
- ・「埼玉古墳群について」「さきたま史跡の博物館について」「古墳クイズ」「古墳時代について」などを加えることができます。

### 学校や児童の実態に応じたプログラムを用意

取り組んだり、対話を通じて高め合ったりする態度を見ることができた。最後には「また作りたいの  
でさきたま史跡の博物館へ行きます！」と言ってくれる児童もおり、実際に何人もの児童が「楽しかっ  
たから来ました。」と足を運んでくれている。

大変な思いをして勾玉を作ることで当時の人々の気持ちを想像するとともに、自分で作ったものを  
大切にしようとする様子も見られた。こうした体験を通して資料としての物の価値や大切さという部  
分にも注目させて保存する意味についてまで態度を醸成していければと考えている。



まが玉と県章との関係についても学ぶ



体験を通して学びの定着を図る

#### 4 効果と反省

博物館・美術館と学校との連携は今後ますます必要となってくる。具体的な資料を活用した授業と  
いうのは児童に新しいことに対する興味を高めさせ、主体的に学びたい、学ぼうとする態度を与えて  
くれる。また、資料を根拠として意見を交流させ合いながら課題を解決していくことは考古学的な学  
習の素地にもつながっていくのではないだろうか。博物館の出張授業は、日ごろ学校では用意ができ  
ない資料を用意して、専門的な切り口から分かりやすく教えていくことができるとても重要な機会  
であると思う。また、なかなか博物館・美術館を訪れる機会のない児童生徒にとって新たな学習の場  
として、まずは知ってもらうという大切な機会にもなるだろう。

授業としての効果としてだけでなく、博物館・美術館について知ってもらい、そこで働く職員や  
そこにある資料を学ぶことも見識を深めることにつながる。そうしたことが資料の貴重性を知り、後  
世まで守り保存をしていかなければならないという気持ちや態度の育成にもつながっていくのである  
と考える。そうしたことが教育されずに資料が消失していってしまうともう二度と元には戻らない。  
それはその時代の人々がどのように生活してきたのか、私たちのルーツを知ることもできなくなっ  
てしまうのだ。

一方で課題もたくさんある。学校では授業時数に基づき年間の学習指導は定められている。そうし  
た中で出張授業を実施するためには、事前に学校の年間指導計画の中に位置付けてもらうことが効果  
的となるが、なかなかそこまでは各校の事情もあるため難しい。博物館側のリソースの問題もあり、  
職員数も限られた中で出張授業を行うため全ての学校において同等の指導ができるわけではない。ま  
た、学校側にも博物館がこのような取組をしていることがなかなか周知されておらず、まずは教員側  
にもこうした取組を知ってってもらう必要がある。加えて資料を学校に持っていき授業に活用  
するというのは資料が破損してしまうリスクもある。どの資料を持っていくのか、どのように資料を  
扱わせるのか、十分に吟味し選別をしていかなければならない。

ただそうした課題を超えていくことで児童が得られる経験は計り知れないものとなる。さきたま史跡の博物館と埼玉古墳群には未来に引き継ぐべき大切な資料がたくさんある。そうした資料が未来へと受け継がれていけるように今後も学校との連携を密にして児童生徒に楽しみながら学ぶ機会を作っていく。

〈引用参考文献〉

文部科学省 小学校学習指導要領(平成29年告示)

文部科学省 小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 社会科編

文部科学省 中学校学習指導要領(平成29年告示)

文部科学省 中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 社会科編